

東日本大震災による被害と

その後の歩み

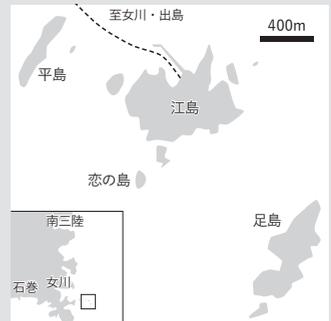
宮城県漁協女川町支所^{えのしま}江島支部事務局長 木村利宏

令和六年元日の石川県能登半島地震で亡くなられた方々に哀悼の意を表し、被災された方々の一日も早い生活再建を願います。平成二三年に同じく地震・津波の被害を受けた宮城の島の住民として、大変心を痛めています。また、津波の被害を受けた輪島市舳倉島の皆さんは、本土側との二拠点生活をされていると聞き、私たちの江島と似たような状況に置かれているとも考えています。

東日本大震災発生後の状況、私たちが当時必要としていたことなどを改めて記録に残すことで、この度の地震から復興へ歩みを進める上で、また今後、全国の離島で起こりうる自然災害に対する備えの参考にしていただければ幸いです。

■江島の概要

女川港から南東部へ一三・八キロメートル。世界三大漁場である有名な金華山^{きんかさん}から北に約一〇キロメートルに位置する標高六三メートルの小さな島が江島です。「陸前江島」とも呼ばれ、神奈川県藤沢市の江の島、長崎県西海市の江島と区別されています。江島は大同二（八〇七）年以前から人が住んでいたとされ、江戸時代においては仙台伊達藩に属していました。現在の江島は二五世帯、人口は四六名で、島を囲むように無人島の笠貝島^{かさがいしま}、足島、恋の島、平島^{ひらしま}があります。これらを含む八つの島からなる江島列島は美しい景観が有名で、全域が「三陸復興国立公園」に指定されています。国の天然記念物として「陸前江島のウミネコおよびウトウ繁殖地」の指





震災後の江島(2018年撮影)。



女川港と江島・出島を結ぶシーパル女川汽船「しまなぎ」。

定がなされているほか、島に伝わる「江島法印神楽」は県の無形民俗文化財に指定されています。

島の周囲に広大な漁場を有していますが、外洋のため波が荒く、女川の内湾のような養殖漁業には適しません。そのため、住民は昔からウニ・アワビ・ナマコ・ホヤ・ホタテなど、タコ籠、刺し網漁業で生活を維持しているほか、島周辺には大型定置が二カ所あり、漁場は賑わいを見せています。

電気は本土からの海底ケーブルで送電、ガスはプロパンを利用。また、北上川を水源とする水道から、海底送水管により送水されています。交通に関しては、島と本土を結ぶ定期

船があり、江島の向かいに位置する出島いずしま(出島港、寺間港)に寄港し一日三便運航しています。しかし、令和六年一二月に出島と対本土を結ぶ橋が開通するため、今後は江島と女川を往復する運航となる予定です。

■大震災による江島の被害

平成二三年三月一日一四時四六分、江島の東南東約一三〇キロメートル付近、深さ約二三キロメートルを震源とする国内観測史上最大級マグニチュード九・〇の巨大地震が発生しました。江島は震源地に一番近い位置にありましたが、その割に大きな振動はありませんでした。これは島全体が岩礁であつたためだと考えられます。

当時は八〇戸ほどの家屋があり、一戸も倒壊せず、また老朽していた空き家も倒壊を免れました。しかし、島に襲来した津波は高さ一四・八メートルにも及びました。家屋は全戸が島の中腹にあり、一戸の流出もありませんでしたが、岸壁に建っている二階建ての漁協事務所、加工処理場、漁具倉庫、給油施設、巻揚施設などが損壊・流出し、そのほかに外港防波堤、船着き場などの港湾施設が全壊しました。六三隻の漁船がありました。沖へ避難した二隻と幸いにも被害を逃れた一隻を残し、すべての船舶が流出・破損しました。

また、この地震により島全体が約一・五メートル沈下、外港防波堤も五メートル沈下しました。この復旧には、多額の費用がかかるため未だ実現できておらず、現在も港内に波が流入する状況が続いています。しかしながら、江島の住民には一人も犠牲者が出なかつたことは幸運でした。

大津波により、海底ケーブルおよび海底送水管が全壊したため、明かりはろうそくのみ。三月のまだ冷え込む時期だったので、古いストーブを出して暖を取りました。プロパンガスを使って、鍋でご飯を炊き、おみそ汁などの食事を作る事ができました。飲料水は島内に数カ所ある古い井戸から、みんなで協力し合つてバケツで水を運んで確保することができました。通信面では、島の緊急時に本部と連絡をとる第七消防団の無線機があつたものの、電源異常のため連絡を取りたくとも取れない状況に陥り、完全に孤立状態が続きました。住民には不安が募り、体調不良を訴える人も出始めていたため、島の幹部の方々が会議を開き、小中学校跡（閉校した町立第五小学校、第三中学校）の校庭に石灰を使って「SOS」を書き、救助を求めました。

災害から三日後の一四日、ヘリコプターが飛来し、住民の安否を確認。女川第一中学校（当時）を避難先として、ヘリコプターで搬送を行なうことが女川町長から伝えられました。高齢化の進む島では、子どもたちが本土で暮らしている例が多く、自分たちは無事だったが、子どもたちはどうなったか消息を尋ねる紙きれを、祈るような気持ちで救援のヘリコプターに託したという声もありました。その翌日、横須賀港から千トンの軍艦が江島沖に寄港し、ウォーターボートで食料を配給してくださいました。

強風の影響などで自衛隊のヘリコプターによる住民搬送が遅れ、実現したのは、発災から五日後の一六日でした。江島で被災した八三名全員が女川本土に避難することができ、そのうち五二人が女川第一中学校で避難生活を送ることとなりました。外には雪が積もり、室内の温度は冷えるばかりで暖房もなく、自宅から持参した毛布で寒さをしのぐことを余儀なくされた上、食べ物も水もわずかで、トイレに行っても断水で流すことができないなど、避難生活の衛生環境は劣悪でした。

じつは江島の住民の多くは、石巻市内にも自宅がある二拠点生活でしたが、本土側の道路も車が走れる状態ではなく、そもそもガソリンも不足していたため、石巻の自宅に避難できたのは三月二三日のことでした。もちろん石巻の自宅も地震と津波により、被災しており、生活再建にはかなりの時間を要しました。被害を免れた家には親戚、家族などが集まり共同生活を送りました。皆の避難場所も石巻、仙台、東京とバラバラであったため、互いの情報を得るための連絡は、おもに手紙を使用していました。

■自分自身は仙台で被災

震災当日、私は故郷の女川から仙台の自宅に帰宅したばかり

りでした。仙台市も地震により、停電、断水、ガスが使えない状況で、電気は三日ほどで復旧したものの、ガスは二カ月間を要しました。また、発災当初はガソリンスタンドが一般へのガソリンや灯油の販売を中止にしていたため、燃料が手に入らない状態。水と食料を求めようと、スーパーには長蛇の列ができ、二時間以上待つこともありました。カップ麺は一人一個に制限され、野菜などは震災が起きる前よりも高値で販売されていましたが、やむを得ずその値段で購入していました。スーパーでの水の確保は、最終的に市内の水道の復旧がほぼ完了する七月まで続きました。

また、両親や姉家族など親戚の安否を確認し、無事であることは確認できたのですが、妻の実家である岩手県釜石市鶴^{つる}住居^{まゐりやう}町に住む義母の安否は確認が取れない状況。「なんととしても義母の安否が知りたい。家がどうなっているか知りたい」という一心で、ガソリンスタンドに朝から並んでは並び直しながら、一〇リットル限定のガソリンを入れ続けて満タンにし、やつとの思いで現地に向かうことができました。しかし、妻の実家は壊滅状態。安否確認のため何度も避難所や遺体安置所に出向きましたが、震災から一三年を経た今でも未だに行方不明です。

■復興への歩み

震災から約一カ月後の四月八日、島の区長や漁協支部長など幹部の皆さんと一時的に島へ戻ることができました。その前日（七日）の余震により、三月一日の地震では被害を免れていた瓦や家の中がめちゃくちゃな状態になってしまいました。その頃、「罹災証明書」の発行とともに全住民に避難手当が女川町から支給され、生活費を確保することができました。また、県漁協に各支部の幹部が集められ、がれきの撤去作業が日当制で行なわれることを告げられました。江島においては、幸いにも一隻（港内に係留していた漁獲物運搬船「第11こうほう」）が綱一本で流出を免れていたため、住民の男性二五名がその船に乗り女川から江島に通い、港内はもろろんのこと、周辺海域漁場のがれき撤去作業を行なうことになりました。その作業は想像以上に過酷で、一度がれきを取り除いても天候が荒れると次々とまたがれきが流出し、きれいにした場所さえも撤去する前とほぼ同じ状態に戻りました。人手不足もあり、作業完了まで数カ月を要し、その間、運搬船で道路補修などを目的に関係者の方も江島に来島し、島内の現状把握と、復旧作業の確認が始まりました。

江島住民の帰島が進まなかったのは、ライフライン復活の目処がつかなかったためです。海底ケーブル・海底送水管が

破損し、復旧にはかなりの時間を要しました。また、定期船は津波の被害を免れましたが、その後気仙沼へ派遣され、人や救援物資の運航に用いられていたため、江島航路を走る船がないことも一つの原因でした。

江島の全住民に対して発令していた避難指示が解除されたのは、震災から半年以上が経過した一〇月三〇日のこと。一月八日には定期船も運航を再開し、島の自宅で生活する住民も増え、人の流れや動きが活発化、復興・復旧作業が進みました。島に戻って驚いたのは、使えなくなった家が多かったことです。余震で屋根瓦が壊れ、梅雨時期に雨漏りして、中が腐って住めなくなっていた家屋も多く、震災時は無事に見えた住宅や倉庫など七〇棟近くを取り壊さざるを得ませんでした。

避難指示が解除されてからは、電気は島内自家発電、水道は浜辺に海水淡水化装置を置き、既存の水道設備につないで生活用水として各家へ送水することになりました。私の家は民宿を営んでいましたが、保健所より水道の許可が下りず、廃業することとなりました。それでも島に戻ることでできたことこそが、私たちの復興に向けたまさに初めの一步。少しずつ生活を取り戻していくことになりました。

以下に、震災後に必要としていたこと、不足していたものを人・物・金の三つの観点から整理しました。



江島の皆さんと定期船にて。左から橋野 欽漁協支部長、稲葉利次理事、阿部 昇副支部長、筆者。

人…ただでさえ高齢者が多く、人口も少ない島。生活航路も気仙沼の応援に行つてしまい、ボランティアやNPOの方などが島に渡る手段がなくなっていました。本土側も大きな被害を受けていたため、町との報告・連絡・相談が難しく、現状把握が困難でした。そのため、高齢者が自力で自宅などを再建せざるを得ない状況でした。

物…未曾有の震災により、ブルーシート、土俵袋、綱など必要なものがあるがホームセンターでも売り切れの状態となり、手に入りませんでした。ライフラインでは、現在も電波

塔をはじめとするインターネット環境、携帯電話の電波状況などが震災前から変わっていない状態。産業の復興に向けて重要な水産加工施設などの建物についても、上述の通り、加工処理場（冷蔵庫・冷凍庫・製氷機）や給油施設などは再建に至っていません。

金…インフラの整備、生活再建は一旦達成しましたが、震災前のように各施設の再建はできていません。離島であることが理由で復旧・復興が遅れてしまったため、復興格差を感じています。

■これからの江島

今年、出島架橋が開通することで陸続きでない女川町内の離島は、江島のみとなります。航路の維持、地域コミュニケーションの活性化をはじめ島を取り巻く課題はたくさんありますが、区長や漁協支部長、町役場、航路事業者などを構成員として「江島離島活性化協議会」を立ち上げることを計画しています。この協議会では、島外の方の協力も得ながら、産業や観光振興を含め江島の活性化を目的に活動していきます。会の詳細については、具体的な動きができてから改めて報告したいと思います。

木村利宏（まむらとしひろ）

一九七四年生まれ。民宿を営んでいた両親のもと一五歳まで江島で過ごす。高校時代は「江島青年団」の一員として活動し、石巻との二拠点生活。高校卒業後は会社員として本土で暮らす。震災を機に江島での活動の比重が大きくなり、継続して宮城県漁業協同組合女川町支所江島支部の委託事務を担っており、二〇二三年から同支部事務局長。